

妊娠中の糖代謝異常と診断基準

妊娠中に取り扱う糖代謝異常 hyperglycemic disorders in pregnancyには、1) 妊娠糖尿病 gestational diabetes mellitus (GDM)、2) 妊娠中の明らかな糖尿病 overt diabetes in pregnancy、3) 糖尿病合併妊娠 pregestational diabetes mellitusの3つがある。

妊娠糖尿病 gestational diabetes mellitus (GDM) は、「妊娠中にはじめて発見または発症した糖尿病に至っていない糖代謝異常である」と定義され、妊娠中の明らかな糖尿病、糖尿病合併妊娠は含めない。3つの糖代謝異常は、次の診断基準により診断する。

■診断基準

1) 妊娠糖尿病 gestational diabetes mellitus (GDM)

75gOGTTにおいて次の基準の1点以上を満たした場合に診断する。

1. 空腹時血糖値 ≥ 92 mg/dl (5.1mmol/l)
2. 1時間値 ≥ 180 mg/dl (10.0mmol/l)
3. 2時間値 ≥ 153 mg/dl (8.5mmol/l)

2) 妊娠中の明らかな糖尿病 overt diabetes in pregnancy (註1)

以下のいずれかを満たした場合に診断する。

1. 空腹時血糖値 ≥ 126 mg/dl
2. HbA1c 値 $\geq 6.5\%$

*随時血糖値 ≥ 200 mg/dlあるいは75gOGTTで2時間値 ≥ 200 mg/dlの場合は、妊娠中の明らかな糖尿病の存在を念頭に置き、1または2の基準を満たすかどうか確認する。(註2)

3) 糖尿病合併妊娠 pregestational diabetes mellitus

1. 妊娠前にすでに診断されている糖尿病
2. 確実な糖尿病網膜症があるもの

註1. 妊娠中の明らかな糖尿病には、妊娠前に見逃されていた糖尿病と、妊娠中の糖代謝の変化の影響を受けた糖代謝異常、および妊娠中に発症した1型糖尿病が含まれる。いずれも分娩後は診断の再確認が必要である。

註2. 妊娠中、特に妊娠後期は妊娠による生理的なインスリン抵抗性の増大を反映して糖負荷後血糖値は非妊時よりも高値を示す。そのため、随時血糖値や75gOGTT負荷後血糖値は非妊時の糖尿病診断基準をそのまま当てはめることはできない。

これらは妊娠中の基準であり、出産後は改めて非妊産時の「糖尿病の診断基準」に基づき再評価することが必要である。

日本糖尿病・妊娠学会「糖尿病と妊娠」15巻1号(2015)